

震災と戦争、トルコと日本の間でヒクメットの詩を読む

イナン・オネル
新 井 高 子

一 震災詩と戦争詩、そしてトルコと日本の間で

新井高子

二〇一一年三月十一日の東日本大震災、その大津波と福島第一原子力発電所の事故のあと、突然、詩が脚光を浴びたかのように感じられる時期があった。いや、それは、わたしのような詩の書き手がいわば大袈裟に思い込んだだけで、一般にはそれほどではなかつたのかもしれない……と、いまでは思い返しもするが。

理由はいくつかある。まず、挙げられるのは、当時の官房長官、枝野幸男による記者会見など、特別番組の合間に流れたAC（旧公共広告機構）のテレビコマーシャル。そこで、金子みすゞの詩「まだまじょうか」が執拗に反復されたことである。特別報道体制のもと、非営利目的のことばだけが許されるという状況下で、い

わば、詩という文芸ジャンルだけは例外的に宣伝され、半ば皮肉にも、その「營利」を得る運を得たと言つていいのかもしれない。

福島在住の詩人、和合亮一がツイッターで発信した『詩の礫』

（追つて単行本化される）の力も大きい。日々、増えていく津波の死者、余震と放射能汚染、物資不足の不安をだれもが抱えていたが、電子メールや電話のやりとりの中で、わたし自身も「こんなときだからこそ、詩を書いてよ」という励ましを、ふだんは文學と縁がない友人からさえもらうことがあつた。また、ある朗読会に聴衆として出掛けた折には、「震災のあとに書いた詩も聞かせてください」と、会場から手が挙がる場面に出くわした。

状況の深層では、未曾有の事態の中で詩の根源的な力が呼び覚まされたのだろうが、表層の直接性だけを見れば、おそらく、「まだまじょうか」によって詩という存在に気付いたり、それを確かめたりした人々が、胸中に不安を抱えていればこそ、災禍を語る詩のことばをつぎに求めたのではないだろうか。和合の作品は、

その受け皿としての役割を果敢に引き受けたのだと思う。そして、わたしも含め、震災や原発事故をテーマにした詩は数多く書かれ、小説や戯曲もそれを取り上げ、いわゆる「震災詩」「震災文学」として括られていく。

特に詩人相互の批評においては、その震災詩をどう考えるか、議論的的なところが多かった。震災や原発の再稼働反対をめぐって詩が量産されることに反応し、危機を募らせる声が強かつたのだ。

その危機感の根底にあるのは、第二次世界大戦中の「戦争詩」、すなはち、戦時に夥しく書かれ、浸透した戦争賛美やその鼓舞の詩の存在だろう。戦争詩の執筆に対する強い反省の上に築かれるることによって、戦後の詩人たちは、しだいにおのずと社会状況に振り回されることのない作品を指向するようになり、社会性よりも人間の内面、その洗練性や私性、ことばの実験を重視した詩が、いわゆる「現代詩」のメインストリームとなつた。そこで、東日本大震災後に噴出した震災詩は、戦争詩が犯した過ち、社会状況に振り回されて書く脆弱さに対する反省を軽視したものとして受けとられる面が強かつたがゆえに、それを感覚的に嫌悪する傾向さえ、詩人どうしという閉じられた世界の内側では見られたのである。

東京を中心とする現代詩の主流は、戦後まもなくの詩を牽引した詩誌『荒地』を出発点としていると言つていいと思うが、それを構成した詩人たちは、戦争体験、従軍体験を根底に据え置きながら、詩の思想性を充実させ、隠喩などによる詩法の実験性を高めた。つまり、『荒地』じたまは、社会性と言語性の両輪を開拓しようとしたと言つていいのだが、おそらく、それを継承・発展させていく過程の中で、半ば慣れ現象が起こり、社会性やメッセージ性の側面が

しだいに削がれていったようにはわたしには見える。そこには、高度経済成長によって暮らしが豊かになる中で、詩が社会から離脱するための、いわば「余裕」が生まれたことも背景にあろうが、戦後まもなくの詩を牽引した、もう一つの重要な詩誌、サークル詩運動とも連動した左翼系の『列島』との「棲み分け」も、意識的に、あるいは無意識的に働いていたことだろう。

坪井秀人をはじめ、詩の実作者でない研究者の中には、『荒地』の流れを汲む潮流（仮にAとする）と『列島』を汲む潮流（Bとする）の双方を客体化し、その止揚を考察する論者があるが、詩の書き手どうしによる批評の場では、戦後七〇年を経たいまなお、AとBは、どうやらほぼ、ふた手に分かれたままであるようだ。それが露呈したのが、震災詩ではなかつたか。実際、その量産や内容的な未成熟を警戒する余り、震災詩の執筆じたいを半ば抑圧しかねない風潮が生じたのは、ほぼAの内側であつて、Bの方では、批判や嫌悪が執筆を束縛することが少ないかわりに、詩法などへの探求が十分とは言えないまま、原発反対というメッセージ性が強調されたきらいが否めない気がする。そして、このような分立は、震災や原子力発電をテーマとする詩が、それぞれの書き手を繋ぎながら「個」を越えて、総合的に成長していくことを、妨げてしまつてゐる気がする。

戦後七〇年、二つの潮流を切り開いた詩誌や詩人の存在感は、年々希薄になりながらも、むしろそうであるがゆえに、かえつて単純化された形でその分立は残り、あまりに自明なまま放置されている。そうは言えないだろうか。

ここで紹介するのは、文学研究者で翻訳家のイナン・オネル訳

によるトルコの詩、ナーザム・ヒクメットの原爆・原発に関する作品である。詩が広く大衆に愛されているトルコでは、社会と詩は緊密な関係を保ち続け、その上で詩人は表現の開拓を究めようとする。無論、そうであるがゆえに、政治犯として拘束される詩人も珍しくない。

トルコ近現代詩の巨星、ナーザム・ヒクメット (Nazim Hikmet、一九〇二～一九六三) は、注にもある通り、日本では、広島への原爆投下によって被爆死した少女をテーマにしたフォークソング「死んだ女の子」(オネルによると、原詩の題には修飾語ではなく、単に「女の子」) の作詞者として知られている。だが、じつは、それはヒクメットにとって小品。政治犯として投獄され、ソヴィエトへ亡命したヒクメットが、革命を志した社会派であるのは言うまでもないが、そこだけに留まる人物ではない。愛も死も神秘も描き、トルコ語詩の詩法を新たに展開させた、たいへんスケールの大きい詩人である。亡命中、スターリン批判の作品も執筆している。

次章に訳出された詩の中で、特に「希望」という作品は、詩法の斬新さと社会的なメッセージの深さ、その両面において優れた傑作の一つだろう。AとBの止揚の体現とも言える。原発をテーマにしながら、このように傑出した作品が世界文学にあるということに、わたしは深い「希望」を与えるもした。

詩人で国文学者の藤井貞和は、原典が外国语であつても、翻訳されたらそれは日本文学、日本語文学と言えるのだと説く。そのような発想に立つならば、AとBの止揚は日本の詩の世界でもじつはすでに始まっている。三月十一日を経験したオネルが、駆り立てられて訳したヒクメット。これも、日本語の「震災詩」では

ないだろうか。文学における「越境」がもはや当然となつた現代、次章の訳詩を基礎の一つにしながら、新しい発想で震災の詩を批評し、つぎなる作品を育み、トルコを初めほかの国々へも発信していく。そのような方向にわたしは可能性を感じる。

オネルは、訳出にあたつて、できるかぎり原詩に忠実な「直訳」を目指したと言う。ドライで簡潔な日本語を駆使することによって、詩の思想性、屹然としたリズムを際立たせながら、強烈な磁力のある言語空間を出現させている。

二 ナーザム・ヒクメットによる原爆・原発の詩

日本語訳 イナン・オネル

ストロンチウム・90

不思議な天気になつてきた、
晴れたり、雨が降つたり、雪になつたり。
原子爆弾の実験のせいだという。

ストロンチウム90が降つて いるようである

草や牛乳や肉の上に、
希望や自由の上に、
門をたたく大いなる憧れの上に。

私たちは自分と競争しているんだよ、恋人よ、

死んだ星に生命を持ち込めるか、
私たちの地球に死が下りてくるのか。

(一九五八)

百日咳でもなく、髄膜炎でもなく
命を落とす、一九五八年に

命を落とす、小さな日本人が広島で
一九四五五年に広島で生まれたという理由で。

希望

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、ゴミ収集車が

死体を集め、歩道から、

失業者の死体を、餓死者の死体を。

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、小太りの男が一人

ベッドを下りる、茫然と着替える

「今日は、誰を、誰に密告しようか?
どうやつたら上司の目に止まるだろうか?」

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、農民一家が

男と女と口バと鋤

畑を耕す、畑は一握り。

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、黒人の運転手が

道端の木に吊るされる

灯油をかけられて焼かれる

そして一人が、コーヒーを飲みに出かけ、

一人が床屋で髪を切つてもらう

一人が早々と店を開き、

一人が若い娘の額にキスをする。

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、一人の子どもが命を落とす
一人の日本人の子、広島で、
年は一二歳、番号が振られている

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、囚人の女性が、

腕を台つながれ仰向うで、

裸の乳房は血だらけで、

尋問される、地下室で

尋問をする者はタバコを吸う

一人は二〇歳で、もう一人は六〇歳、

シャツに汗がにじむ、袖口が巻かれている

そしてサンダバッグ、電極棒。

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、薔薇の葉つぱに当るころ、

飛行場で静かなパイロットたち、

ジェット機に水素爆弾を載せる

そして日が昇るころ、日が昇るころ、

機関銃で打たれる

大学生と労働者

そして大通りのアカシアの木

窓やベランダの植木鉢、

そして日が昇るころ、国の要人が

会食から邸宅に戻る。

そして日が昇るころ、鳥が鳴く。

そして日が昇るころ、日が昇るころ、

若い母親が赤ん坊に乳をやる。

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、私は一つの夜を

一つの長い夜を、また不眠と

苦痛の中で過ごしたようである。

考えたようである、別れや死を、

あなたと故郷を考えたようである、

あなたと故郷と世界を。

稼働する、原子炉が稼働する

人工衛星が通り過ぎる、日が昇るころ

そして日が昇るころ、まつたく希望はないのか？

希望、希望、希望、

希望は人間にある。

女の子

門を叩くのは私よ

門を一つずつ

皆さんの目には見えません

死人は目に見えないもの。

広島で死んでから

かれこれ十年になる。

私は七歳の女の子、
死んだ子どもは、大きくならないの。

髪の毛に火がついた、はじめに、
目が燃えてしまつた。
一握の灰となつた、
灰は空へ飛び散つた。

私は皆さんから、自分のために
何も欲しくありません。

飴だつて食べられない、
紙のように燃えた子は。

叩いています、皆さんの門を
おばさん、おじさん、サインを一つ下さい。
子どもが殺されないように。
飴も食べられるように。

貴方をも一人の母が産んだでしよう
母たちをあやめないで下さい、紳士たちよ
雲が人間を殺さないように

走つている六歳の男の子

走つている六歳の男の子
風が通り過ぎる樹木を
貴方も走つたでしよう昔は

子供をあやめないで下さい、紳士たちよ
雲が人間を殺さないように

嫁は鏡で髪を結う
鏡の中で誰かを探す

勿論貴方をもこう探すひとがいたでしよう
嫁たちをあやめないで下さい、紳士たちよ
雲が人間を殺さないように

年を取つたら人は

甘い思い出だけを思い出すべき
可愛そうよ、年寄りをあやめないで下さい
紳士たちよ、貴方も年寄りでしよう
雲が人間を殺さないように

(一九五六)

雲が人間を殺さないように

母親です、人を人にするのは
明るさです、我々の前を行く

(一九五五)

海で雲によつて殺された

日本人の漁師は若い男であつた、

私は友人たちから聞いたこの歌を、

太平洋で黄色の夕方であつた

魚を釣つた

食べるものは死ぬ

我々の手に 触れるものは死ぬ

この船は 黒い棺桶

舷窓から入るものは死ぬ

魚を釣つた 食べるものは死ぬ

直ぐにではなく ゆつくりと

肉が腐つて、裂ける、

魚を釣つた、食べるものは死ぬ

我々の手に 触れるものは死ぬ

塩で、太陽で洗われた

この誠実な、この勤勉な

我々の手に 触れるものは死ぬ。

直ぐにではなく ゆつくりと

肉が腐つて、裂け、

我々の手に 触れるものは死ぬ。

この誠実な、この勤勉な

我々の手に 触れるものは死ぬ。

直ぐにではなく ゆつくりと

肉が腐つて、裂け、

我々の手に 触れるものは死ぬ。

恋人よ 私を忘れよ
この船は 黒い棺桶

入るものは死ぬ
我々の頭上を通つた 雲が

首を抱くな、愛しい人よ
死は 私から貴女に移る

恋人よ 私を忘れよ

恋人よ 私を忘れよ

首を抱くな、愛しい人よ
死は 私から貴女に移る

恋人よ 私を忘れよ

恋人よ 私を忘れよ

この船は 黒い棺桶だ

恋人よ 私を忘れよ

腐つた卵より腐敗する

私から作る子供は

この船は 黒い棺桶

この海は 死んだ海

人間たちよ 皆今どこにいる

どこにいる？

(一九五六)

注

詩人ナーデム・ヒクメット（一九〇二—一九六三）は、トルコの近現代詩の巨人。一九五〇年代後半には、世界諸国の核武装を危惧する詩を数多く発表した。特に、ヒロシマをテーマとした「女の子」と題された詩は有名であり、日本語でも「死んだ女の子」という題で紹介

されている。「ストロンチウム-90」とは放射性物質の一種で、半減期が約二九年と長い。久しくその名を聞いていなかつたが、二〇一一年三月十一日の大震災で事故を起こした福島第一原子力発電所から、漏れ出たとの報道があつたので、思い出したのである。「ストロンチウム-90」という言葉を、いの詩以外の文脈で耳にする」とは想像していなかつた。

参考文献

- ナーグム・ヒクメット、峯俊夫訳『死んだ少女』国文社、一九五八年
坪井秀人『声の祝祭——日本近代詩と戦争』名古屋大学出版会、一九九七年
和合亮一『詩の礫』徳間書店、二〇一一年
石井啓一郎『ナーグム・ヒクメット詩選』私家版、日本詩人クラブ主催「国際交流トルコ2013」での発表
イナン・オネル「日本詩人クラブ主催『国際交流トルコ2013』講義資料」
イナン・オネルによるトルコ詩の翻訳連載（詩誌『//』掲載）、//・
プレス、二〇〇一年～現在

付記

ヒクメットの翻訳詩の初出は、『//』四二号（二〇〇一年）、
一一五号（二〇一一年）。改稿の上で本誌に再録する。改稿にあ
たつて使用したトルコ語詩集は、左記である。

Nazım Hikmet, Bütün Şiirleri (ナーグム・ヒクメット全詩集) , Yapı Kredi Yayınları, 2015 İstanbul, ISBN: 978-975-08-1217-0